恵那市教育研究所だより
No.283
令和6年
9/27

# えな

「ホコノコノ　モロコ」
三郷小学校　4年生　下川　歩

恵那市教育研究所
http://www.ena-gif.ed.jp/
恵那市長島町正家一丁目1番地1　恵那市役所西庁舎4階
TEL(0573)26-6850　FAX(0573)26-2155

## 子育て世代の「ワークライフバランス」

恵那市教育委員　村松　訓子

「ワークライフバランス」という言葉を最近耳にして、気になって調べてみました。簡単に表現すると、仕事の時間を減らして家庭や地域での時間を増やしてバランスをとろうということですが、あくまでも仕事も家庭も両方ともしっかり楽しめている（充実している）という状態を意味する言葉だそうです。労働時間や労働形態を見直して、仕事と生活、両方の充実を目指すこと、とも書かれていました。

私たちが育った昭和時代は、「男性は仕事、女性は家事、育児」という暗黙の役割分担が定着していました。私たちが子育てをした平成から令和の今日に至るまでに、この分担も徐々に変化してきました。新しい働き方、家族の在り方が見直されてきました。

例えば男性の育児休暇なども、まだまだ不十分とはいえ、取得可能になりました。育児休暇の他にも看護休暇や介護休暇、短時間勤務など男女問わず働き方の選択肢が広がっています。子育ても介護も本当に大変です。昼夜逆転が日常茶飯事だからです。しかし、「男性が育休を取るにあたっては職場の理解がなかなか得られず難しい」という記事を読みました。これではワークライフバランスの推進からかけ離れてしまいます。先日、「思い切って育休を取得し、育児に関わる事で毎日新しい発見があり、子育てを通じて出会いがあり、地域とのつながりももてました」という30代男性の体験談も読みました。親子の関係は時間をかけて様々な気持ちや感情を共有することで家族になっていくのだと思います。育児中にしか見えない景色や体験が大変なことも楽しめたり…。

そして国や各自治体、もちろん恵那市も子育て支援の政策やサービスも平成から令和にかけて時代に合わせて大きく変化し、整備されつつあります。「ワークライフバランス」を実践しようと日々模索しながら奮闘している子育て世代の方々を後押しする、応援する、温かい職場、自治体であって欲しいと願います。

R80
古紙配合率80%以上再生紙を使用しています

武並小学校

# 特集 地域の一員として、小学生にできること

武並小学校では、「自分のいのちは自分で守る児童・地域の担い手として行動する児童」の育成を目指し、地域や関係諸機関と連携して、災害時を想定した実践的学習を継続的に実施しています。恵那市役所危機管理課、恵那市防災研究会、恵那市消防署、武並消防団の協力による「防災スクール」は、平成24年度から継続して実施しており、本校の防災教育の柱として、児童の生命尊重への意識を高め災害等への対応力の育成につながっています。また、令和４年度以降、恵那市防災の日にあわせて実施している「武並町避難所設営訓練」は、関係諸機関や地域、保護者と連携し、学校だけでなく家庭や地域全体の防災意識を高めることにつながっていると考えます。

## ～６年間を見通した防災スクール～

防災教育年間指導計画をもとに小学校６年間の活動を系統的に整理し、「防災スクール」を年に２回、全学年で実施しています。毎回、指導者と担任とで事前打ち合わせを行い、児童の実態に合った活動内容に変更したり、年度当初の計画とは違った新たな活動を取り入れたりして、連携を図りながら取り組んでいます。今年度、第1回の活動内容を紹介します。

<第１回 防災スクール>　令和６年６月17日（月）

○１年生「非常食を食べてみよう」
・災害が起こった場合を想定し、食について考え、アルファ米を実食する。

○２年生「防災倉庫のことを知ろう」
・マンホールトイレや防災倉庫など、学校周辺にある防災関連施設を知る。

○３年生「避難所生活を知ろう」
・簡易パーティションや簡易ベッドを組み立てる。新聞スリッパを作る。

○４年生「災害時の救助を学ぼう」
・毛布担架をつくる。ロープワーク、三角巾を使った怪我の手当の仕方を学ぶ。

○５年生「武並防災マップを作ろう」
・ハザードマップを活用して、自分の地域の危険箇所、避難所を調べ、防災マップを完成させる。

○６年生「災害から命を守ろう（家庭内DIG）」
・自宅にいる時の災害について考える。家具転倒防止など、自宅での命の守り方を学ぶ。

また、毎年３月には、恵那市防災研究会の岩井防災士から、６年生が「武並子ども防災士」に任命していただくことで、地域の担い手として行動する児童の育成につながっています。

## ～武並町避難所設営訓練～

毎年９月の「防災の日」に行っている市の防災訓練において、武並町は「武並町避難所設営訓練」を実施しています。訓練には小学生も参加し、「避難所スペース」「高齢者スペース」などのブースを、関係諸機関や地域住民らと一緒に、１時間ほどかけて体育館に設営します。児童らは、これまでの防災スクールで、簡易ベッドやパーティションの設置等を体験しており、避難所レイアウトを見ながら積極的に参加する姿が見られます。

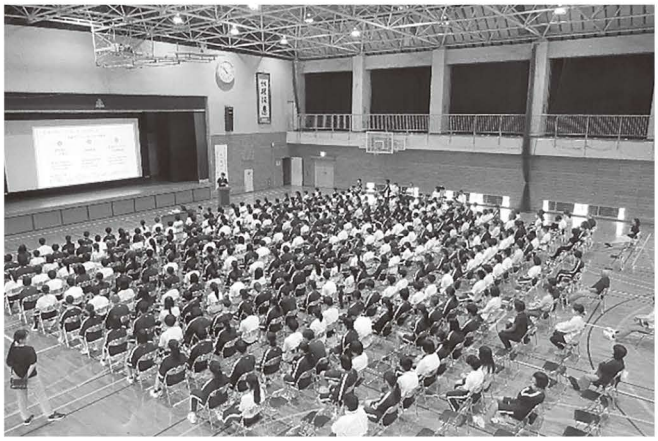
６年間の防災学習を経験した武並小学校の子供たちが、実際の災害時において、自分自身の命を守るだけでなく、地域の一員として行動しようとする自覚をもってくれることを期待しています。

恵那東中学校

# 特集 「命を守る」自分を守る・仲間を守る・地域を守る

## 1．防災を通して命の大切さを考える

恵那東中学校では、毎年「命の日」として、全校生徒で命の大切さを考える機会をもっています。今年度は、恵那市社会福祉協議会の鵜飼敏伸さんに「令和６年能登半島地震支援活動から　命の大切さを考える」と題して講演していただきました。



講演では、災害ボランティア活動や災害ボランティアセンターなどについての説明や、実際に能登半島で携わった支援活動についての具体的なお話がありました。「一ヶ月間、体育館などの避難所で生活をすることになったら、どんなことを感じるだろう。」「地震によって傾いてしまった家に、住み続けるおじいさんは、どんな気持ちなのだろう。」という問いについて、生徒たちが自分のこととして考え、意見交流をし、互いの考えを知ることができました。

〈講演後の生徒の感想〉

講演を聞いて、能登半島地震を受けて出た被害をボランティアなどの人が支えていることをより詳しく知ったことで改めて人と人が助け合うことの大切さ(人とのつながり)を学びました。だから募金などでも支援などに少しは役に立つと思うから、機会があったらぜひやってみたいです。

（１年生）

見せてくれた写真が能登半島地震から二ヶ月後の写真ということに驚きました。二ヶ月もたったのにあんなにひどいなんて、地震って怖いなと思いました。いつ何が起こるか分からないから常に避難のことなどを考えながら生活したいです。

（２年生）

「人はつながりの中で生きている」という言葉は災害ボランティアの人たちが特に大切にしている言葉だと思いました。東中スローガンにある学年を越えた縦のつながりのように人とのつながりを大切にしてこれから生活していきたいです。

（３年生）

どの生徒も、災害の恐ろしさを改めて感じながら、「自分に何ができるのか。」「自分がすべきことは何か。」ということを真剣に考える機会になりました。恵那市に、災害が起きた時には、地域を支える一員として、頼りになる存在になることを期待しています。

## 2．防災リーダーの活躍

防災リーダーを中心として、地域の防災および減災を目的に、「自助」「共助」の原則に基づき、自治会組織や自主防災組織と協力しながら、住民の防災意識を高める活動を行っています。今年度は、災害時に必要な知識を深めつつ、自主防災隊とともに事業提案や防災訓練に参加しました。

５月には、恵那東中学校の防災倉庫の配置換えを実施し、有事に備える重要性を学びました。防災倉庫の棚を再配置し、物資を効率的に収納することで、緊急時に迅速な対応ができる体制の必要性を理解しました。６月には、土のう作りや泥出し訓練を行い、実際の災害時に役立つ知識と技術を習得し、実践力を向上させました。これらの訓練を通じて、生徒は防災活動の実際を体験し、自分たちの行動が地域の安全に直結することを実感しました。また、他の防災団体と連携して、地域全体の防災意識を高めるための啓発活動も展開しています。今後は、防災リーダーを中心に防災士の資格取得を進めることで、より強固な防災体制を構築し、災害時に頼りになる生徒を育成し、地域全体の防災力向上を目指していきます。

# 特集 デジタル版授業参考資料

## ○ 授業づくりに役立ちます

「この授業では、どのような児童生徒の姿を目指せばいいのだろう」、「授業中の児童生徒の、どのような姿を見つけて、価値付けてあげるといいのかな。」と日々の授業作りや授業改善に悩まれることはありませんか。特に経験の浅い先生の場合は、初めて担当する学年の授業の場合がほとんどで、どのような授業、どのような児童生徒の姿を目指すのか、具体的な姿を描くことも難しいのではないでしょうか。中学校では校内に同じ教科の先生がいないため、相談も難しく、ついつい一人で悩んでしまうという先生もいらっしゃるかもしれません。

そのような先生方の悩みを解決できるように、これまでにも参考にできる指導案や授業動画、学習プリントなどを市内で共有してきました。しかし、「指導案を読んでも、言葉だけでは具体的な児童生徒の姿がイメージしにくい。」、「動画を見ても、どのようなねらいの時に、このような児童生徒の姿なのか分からない。」などの課題がありました。

そこで、展開案と授業動画、授業で利用した教材（ヒントカードや解説動画等）をセットにした「デジタル版授業参考資料」を作成しました。

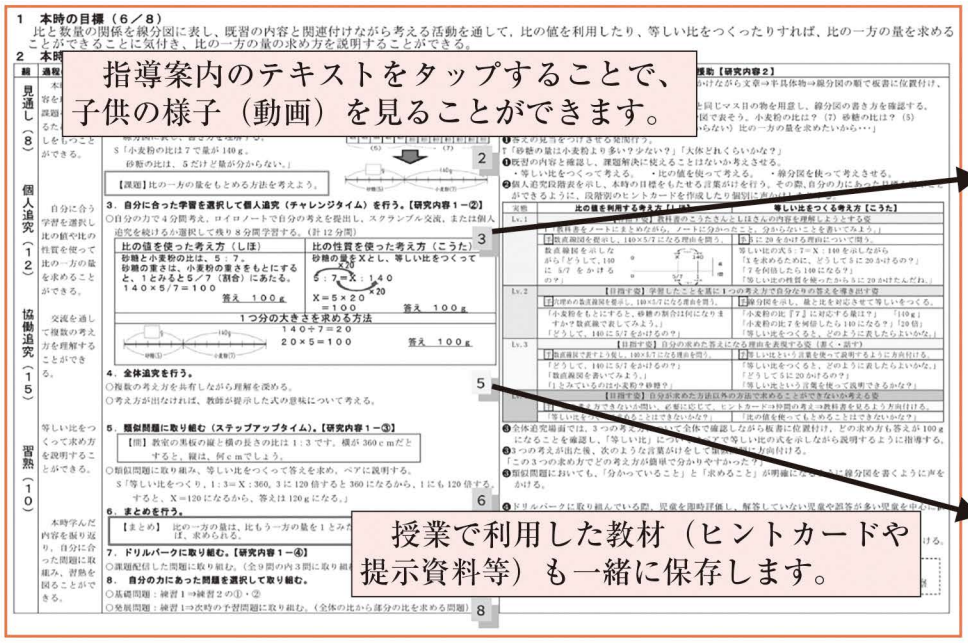
## ○ 収納場所・内容

（1）データは「ロイロノート・スクール」の資料箱に入っています。

（資料箱→岐阜県恵那市先生のみ→11DX教材→00授業参考資料）

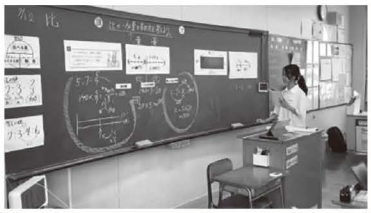
（2）「展開案」「授業動画」「教材・教具（ヒントカード等）」などが１つの資料になっています。

※　指導案のテキストをタップすると、授業動画や教材等を見ることができます。




ヒントカードを基に交流する様子

類似問題を説明する様子



（3）現在収納されている資料

① 算数　　小学校６年生　『割合の表し方』　大井小学校　有我　美輝　教諭

② 社会（地理）中学校２年生　『日本の諸地域　中国・四国地方』　山岡中学校　橋本　皐介　教諭

今後、順次増やして、充実させていきます。

こども園の特色ある活動

# 生き生きと育つ子供の心と身体をめざして
## ～人・自然とのかかわりの中で～

みさとこども園

みさとこども園は、四方を山々に囲まれ、豊かな自然環境に恵まれています。

園目標である『丈夫な身体の子』『仲良く遊べる子』に向けて、どのようなことが大切かを考え、体を動かす遊びや、三郷の自然を生かした活動をたくさん取り入れています。また、地域の方に見守られながら過ごしています。

### 1．地域とのつながりを通して

地域の方とのつながりがたくさんあります。「みさと愛の会」の皆さんには毎年『サツマイモづくり』を経験させていただいています。子供たちがサツマイモを植えやすいように園近くの畑で、苗付けを教えてくださいます。また、枯らさないように、暑い中水やりもしてくださいます。秋には一緒に収穫会も行います。

その他にも園の畑を耕してくださったり、自宅で育ったスイカをたくさんプレゼントしてくださったりします。今後は、森をお借りして木育体験も計画していきます。地域の方のおかげで多様な体験ができ、子供たちの豊かな成長につながっています。

そんな地域の方々に感謝の気持ちを伝えようと、『おもてなしの会』を開きました。各クラスが自分たちでできる〈おもてなし〉は何かを考え、ゲームや触れ合い遊びなどで地域の方に楽しんでいただきました。いつもお世話になっていますが、この会では子供たちもおもてなしをする側として張り切って主体的に活動することができました。

地域の方に見守っていただきながら、今後もいろいろなことに挑戦していきたいです。

### 2．遊びを通した体づくり

体を動かすことが大好きな子供たちです。特色ある園の活動として、意識的に集団遊びを取り入れています。思いっきり走ったり、止まったり、タッチしたりする中で、体の使い方や力加減が身に付いてきます。また、友達とかかわる中で面白さを共感したり“負けて悔しい。今度は勝ちたい。”という思いを味わっています。友達と協力したり、時には我慢したりする経

験を通して、気持ちを切り替える力も付いてきます。遊びの楽しさを味わうことで、自分たちで誘い合って遊びを始めたり、ルールを考えたりするなど、多くの気付きや学びの場になっています。

園外にも出かけています。四季折々の自然に触れながら野山を駆け回って、体全体でいろいろな感触を味わっています。

体を使ったいろいろな遊びを通して、生き生きと心も身体もたくましくなってほしいです。

### 3．自己発揮のできる子に

自分の思いを伝えたくても、怒ったり泣いたりしてしまったり、強引に思いを通してしまったりと、なかなか言葉で伝えることができない子が多く見られます。まずは、保育者がじっくり丁寧に話を聞きながら気持ちや考えを言葉で引き出していき、思いが伝わる心地よさを味わえるようにしています。そして、同年齢の友達や異年齢児とかかわりの中でも自分の意見を伝えたり、友達の考えにも気付いたりと、お互いを認め合える経験の場を大切にしています。クラスの話し合い『ミーティング』でも、考えたこと思ったことに間違いはなく、“自分の思ったことを聞いてもらえばいい。友達はこんなこと思っているんだ。”と気付き、言葉で伝えることの嬉しさや、友達との気持ちの通じ合いの心地よさを味わえるようにしています。

いろいろな意見があること、共感できることなど、いろいろな場面での経験を積み重ねていくことで、自己発揮ができる子を育てていきます。

温故知新★

# 一人一人を大切にする

心に残る遊び・授業・先輩・職員

山岡小学校　校長　伊藤　桂子

教職に就いて初めての学級懇談会で、「一人一人を大切にした学級づくりをしていきます」と保護者に話したことを今もはっきりと覚えています。これは先輩の先生方のアドバイスをもとにした言葉で、「個を大切にする授業」が注目されていた時期でもあり、「一人一人を大切にする」という言葉が、自分にとって特に響くキーワードでした。

しかし、現実はそれほど単純ではありませんでした。数年後には、その初心を忘れ、個性の強い子供達に翻弄され、学級経営や授業づくりに悩む日々が続きました。周囲の先生方に相談しても納得できる解決策は見つかりませんでした。

そんな折、ある年の教員免許更新講習で、専門の大学講師から「特別支援教育」について学ぶ機会がありました。発達障がいについての知識を深めることで、子供達の特性や背景を理解し、発達過程を見守ることの大切さを再確認しました。子供達が置かれている状況を正しく把握することの重要性に新たな視点を得たのです。

それまでは、「一人一人を大切にする」と言いながら、自分が作った「こうあるべき」という枠に子供達をはめ込もうと躍起になって、狭い見方をしていました。子供にはそれぞれに背景があって、丁寧に広く子供を見ることが重要であることを見失っていたのです。

これからも、「一人一人を大切にする」という言葉の重みを意識しながら、子供達一人一人がもつ背景や特性を理解し、その子にしかない良さを見つけて伸ばしていくことを大切にしていきたいと思います。

研究所NEWS

# 個別最適な学びと協働的な学びを考える
## ～異年齢（複式）保育研修会から～

幼児教育課

第１回異年齢（複式）保育研修会を６月13日（木）に瑞浪市立陶幼児園を会場として開催しました。

【交流会の目的】

日々、異年齢児を見ている担任の困り感を共有したり、先生の実践を聞いたりすることで、やる気をもてたり、具体的な計画の参考になったりできないかと考えています。恵那市、瑞浪市で異年齢学級を担任して頑張っている仲間がいて、いつでも相談できる関係ができれば心強いのではないかとか考えて、研修を実施しました。

【異年齢（複式）保育研修会の保育参観】

保育が始まり、先生の話を聞く園児の姿は、昨日の続きの遊びを早く始めたい気持ちが表情や体の動きから伝わってくる。４歳児と５歳児の異年齢学級の園児たちが今夢中になっているのは「お家作りをしよう」という制作遊びです。

この遊びは、ダンゴムシを見つけて飼育を始め、ダンゴムシのお家を作ったことから、季節の遊び、段ボールやペットボトルキャップを使った遊び場作りへと発展していきました。また、新聞紙や広告等で剣や兜を作り、忍者になりきり遊んだ経験から、兜と忍者の大きいお家を作りたいという活動にも繋がっていきました。

遊び場へ移動し、段ボール等を使った作りかけのお家に行くと、園児は昨日の続きを始めたい場所に行き、段ボールでお家を広げたり、屋根を作ったりし始めました。先生は、園児が作ろうとしている場所でガムテープを貼る手伝いをしたり、「どうしようかな」と迷っている園児に「どうしたいの」と返した後に、「５歳児さんに相談してみたら」と伝えどうするか見守ったりして、一人一人の園児が自分の手で作ることや、思いを引き出す保育を行っていました。保育室の中は、園児の思考する声や、園児が制作する音でいっぱいでした。

幼児教育は「感じる」「気付く」「考える」「工夫する」「興味をもつ」「関わる」等の経験を重視し、遊びを通した総合的な指導を行います。小学校教育のように、「できるようになる」「わかるようになる」等の目標への到達度は重視していません。幼児期は、遊びを通して必要な能力や態度等を獲得していく時期です。だからこそ、「遊びを通した学び」を大切にしています。ただ自由に遊ばせるのではなく、幼児一人一人が自ら興味関心をもって、遊びに夢中になる中で試行錯誤しながら、様々な体験を重ねていく活動にしていくことが大切です。今回の瑞浪市立陶幼児園の異年齢保育には、まさに幼児教育が大切にしたいことが詰まっていました。

【異年齢保育のメリット】

１．年齢の違う園児が共に育ち合うことができる

今回のお家作りをしようでは、４歳児が玄関のチャイムを段ボールで作ろうとして四苦八苦していた姿を見て、５歳児は「思いどおりの形（立体）にできないなら、貼り付けることをやめて、描いちゃえば。」と伝えました。４歳児の表情はみるみる明るくなり、その考えがあったかという思いの「そうか、そうすればいいのか。」というつぶやきが聞かれました。

２．多様な人間関係を築くことができる

自分より年下で自分よりも「何かをできない」子や自分より「弱い」子に対して優しく接することができます。また、自分より年上で、「何でもできてしまう」子に憧れたり、真似したくなったりすることで、目標になったり、努力したりします。異年齢保育を通じて、異年齢の園児と関わり合うことで社会性や協調性、思いやり等の気持ちが生まれます。

【保育教諭への負担】

保育教諭は、異年齢児が一緒に過ごす空間で、一人一人の子供たちが安心して遊べる環境を考えなければなりません。異年齢児の活動の内容やレベルの設定を計画することも必要です。一人一人の様子を把握し、遊びや活動で、年上の園児が待つ時間が長くなり、物足りなさを感じないように、年上の園児の意見が通りやすくならないように、年下の園児がおいてきぼりにならないように、保育内容を工夫する必要があります。

【まとめ：第１回研修会を終えて】

◎ねらいをもって異年齢の遊びを構成するのは難しいが、単独クラスにはない育ちがある。５歳児が４歳児を受け入れる姿は受容や自身の学びを伝える、４歳児は、５歳児以上にやってみたいを体現していた。それは、安心できる環境だったからである。

◎年齢関係なく、遊びの中で、友達との会話を楽しみ、友達の考えからアイデアを広げていく姿から、遊びが連続的に行われ、思考がつながっている。学びを継続して行う計画が大切である。

◎遊びの過程で、「どうしたいの」「友達に相談してみたら」等、保育教諭が答えを与えるのではなく、園児に思考させ、判断させ、表現させる指導技術を学んだ。

【参考文献等】

幼保連携型認定こども園　教育・保育要領解説
文部科学省　幼保小の架け橋プログラム
幼児教育と小学校教育がつながるってどういうこと？（幼児教育及び小学校教育関係者向けの参考資料）

研修感想　恵那市　東野、中野方、飯地、串原、上矢作こども園
瑞浪市　陶、日吉幼児園